

2024年2月の総評に代えて 高橋修宏

本棚の隙間を埋める春の風 (まちりこ 埼玉県)

「本棚の隙間」を吹きぬけるではなく、「埋める」の一語がポイントか。あたかも「春の風」そのものが、一冊の（あるいは数冊の）本のように捉えられている。

多分すべて (源楓香 東京都)

違法アップロードなんだ
君も、君と見たあの夜桜も

何より、「違法アップロード」の一語が異和感をもたらす。「君」も「夜桜」も、ヴァーチャルだったのか。現代に対する不穏な予感や批評さえ含んだ一作か。

草青むコロポックルの置手紙 (田崎森太 東京都)

「コロポックル」とは、古来からアイヌの伝承に登場する^{フキ}蕨の葉に隠れるほどの小人。「置手紙」という言葉が、そんな小人に、さりげなく実在感を与えている。

蝶の昼さりさりさりと砂時計 (吉沢美香 宮城県)

「さりさりさり」という不思議な響きは、砂時計が落ちてゆく様子を捉えた擬音か。「蝶の昼」という長閑な時間の中で、ただ虚無的に乾いた砂だけが落ちてゆく。

刺さってなんかいない (こはくいろ 大阪府)

こんなにも狂いなく
つめたいままだから

何が「刺さって」いないのか、その実体が明かされないままに、二、三行で作中主体の
想いだけが吐露されてゆく。もしや刺さるものとは、言葉という凶器なのかもしれない。

テキトーにインコの声を
真似したらそのまま
会話が続けてしまう
(貴田雄介 熊本県)

「声」を媒介として、インコという鳥と人という存在が混じり合い、ときに入れかわる
ような作品。どこかノンシャランとしながら、ユーモラスな不条理感も漂う。

世界史の一問先に広がった
戦場をまだ僕は知らない
(うたた 岡山県)

「世界史」という教科を踏まえながらの、現代の世界情勢に対するアイロニーか。「僕は
知らない」と記すことも、個という存在からのニヒルなプロテスト。

読点が羽毛のように散らばって
食い千切られた句点を撫でる
(常田瑛子 山口県)

日本語でありながら、容易に読めない文章を前にしたとき、「読点」や「句点」だけが浮
遊し、現前するのかもしれない。それにしても、この「読点」や「句点」の生々しさは只
事ではない。何かの事後のような、暴力的な気配さえはらんでいる。

目をとじる
あけたら雨は止んでいて、
切られた髪にも重みがあった
(藤井柊太 神奈川県)

おそらく、美容室の情景なのだろう。「目」をとじる、「髪」を切られるという身体的な変化が、雨が止んだという外景の変化と照応しているようだ。ささやかな時間それ自体が、巧みに描かれている。

錆びて
淋しい
残雪の
三輪車
(加那屋こあ 東京都)

サの頭韻を活用した多行形式の俳句のような一作。三行目、濁音の「残雪」が、作品内にささやかな屈折をつくり出す。

音の無いトムとジェリーが
繰り返し流れる待合室で眠った
(狛犬吠 岡山県)

すでに、どこかで経験したような白昼夢のようなイメージをまとった作品。「音の無い」、そして「繰り返し流れる」ことによって、催眠的とも呼べる世界に誘われるようだ。

ルンバどこいくのそっちは冬の海
(斎藤よひら 京都府)

「ルンバ」というダンスの名を付けられた全自動掃除機。そんな「ルンバ」への呼びかけが、ユーモラスでありながら、どこか優しくも切ない。作者にとって、すでに「ルンバ」は小さな子ども、あるいは愛しいペットのような存在なのかもしれない。